



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代化された身体：芥川龍之介「お富の貞操」について
Author(s)	高，啓豪
Citation	研究論集，13，35(右)-47(右)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54083
Type	departmental bulletin paper
File Information	024_KA0.pdf



近代化された身体

——芥川龍之介「お富の貞操」について

高 啓 豪

要 旨

個人の身体は、他者とのつながりによって初めて社会性を持つ。これを体現した言葉のひとつに「貞操」があると思われる。この言葉は、極めて私的な領域のものでありながら、公での評価によって初めて意義を持つという、両極端の意義を具している。本発表では、明治時代の上野で起きた戊辰戦争と内国博覧会を背景に描いた芥川龍之介の「お富の貞操」を貞操のテキストとして取り上げ、語り手・芥川龍之介が駆使した貞操のレトリックを再考し、読み解いていきたい。

物語の場所は明治元年と明治二十三年の上野というトポスである。同一の場所ながらも、そこに付与される意味合い・ニュアンスが時代推移によって変わる特徴的な作品として、近代化が表象され可視化されるのである。そこから戊辰戦争という戦時中における非戦闘員である女性に加えられるレイプという形の暴力問題、婦人貞操問題、ひいては日本の近代化などの問題を、身体論の視点から考える。

物語のタイトル「お富の貞操」に鑑みて、作品の主人公がお富であることはたやすく思いつく。本作は、お富の持ち前のおおらかな性格が、家庭を幸福へと導く物語であることとの読み解き方が多かった。しかし、語り手芥川が、本作品を第三人称で描いているため、物語においても一人の登場人物新公にも同様の重みが置かれていることは見過ごされがちである。新公の立身出世が語られる結末があるからこそ、そこには描かれていないテキストとして、新公の改心談が対等的に存在すると思われる。そこで、本作品と芥川が題材を得たとみられるストリンドベリーの「令嬢ジュリー」（一八八八年）との比較を皮切りに、登場人物の男女の位相、男性の持つ上昇志向などを併せて論じたい。

また、近代化では個人の自覚が要請されるが、結局のところ、本作での「近代化」は明治政府による国家の傘下に厳重に管理され、内国博覧会という形で収束されるメタファーとして描かれていると思われる。本発表は、一九二〇年代に発表さ

れた「お富の貞操」という作品を取り巻く言説の中から、近代化の中で貞操という概念は如何に確立され、国家の中においてどう機能しているかを考察する。「貞操」は女性のためにあるものか、男性のために作られた制度か。これは、身体・セクシュアリティのアプローチを通して考えると興味深いものである。

一 お富の貞操

芥川龍之介の開化物に当たる「お富の貞操」(『改造』大正十一(一九二二)年五月、九月)は、物語の時間を幕末・明治期に設定し、場所を上野に選んだ。明治期というコンテキストを引用しつつ、また明治期における二つの時間を同じ空間で照合し比較することで、意図的に開化の効果を前面に出している。明治維新による文明開化という大きな時代的文脈の中、近代化が如何にして人々の生活に影響を及ぼすのか。「お富の貞操」は、その近代化を観照するのに格好のテキストである。このテキストは、お富と新公という二人の男女の遣り取りによって、彼らを取り巻く時代とトポスを可視化しているのである。

タイトルで既に掲げた「貞操」という言葉は、惹句・キャッチフレーズ的な効果を機能しているのみならず、的確に作中の一大キーワードとして働きかけている。貞操は、女性の身体を社会性につなげる、極めてプライベート的なものでありながら、パブリックの評価によって初めて意義を持つ、両極端の意義を具有している概念だと考えられる。本稿では、「お富の貞操」のテキストから見る物語の場所、時代や人物像を取り上げ、芥川龍之介が構築した「貞操」の

レトリックを探ってみる。

また、芥川龍之介が題材を得たとみられるストリンドベリ「令嬢ジュリー」を取り上げ、人物の造形の側面から比較し、両作の作中人物の男性の上昇志向を併せて論じ、従来看過しがちな新公の側面からテキストを検討してみたい。

なお本稿は、一九二〇年代に発表された「お富の貞操」という作品に取り巻く言説の中から、身体・セクシュアリティのアプローチを通して、近代化の中で貞操という概念は如何に国家の中に取り込まれたかを考察する。

二 場所・時代と人物の相乗効果

「お富の貞操」の話は、以下のように展開される。明治元年五月十四日の昼過ぎ、官軍と彰義隊との上野戦争の前日、乞食と思しき身なりの人物新公は、雨宿りをしようと人が立ち退いた上野界隈の或る町家に入り、そこで取り残された飼猫と、その猫を連れ去ろうとする少女お富と出会う。新公とお富は、しばらく口喧嘩の末、軽い殴り合いに発展する。何かのはずみで新公は若い女性であるお富に欲情し、忍ばせていた銃を猫に差し向け、「ちや猫は助けてやらう。

その代りお前さんの体を借りるぜ。」と、従わないと猫の命を落とすと脅し、お富に性的交渉を要求する。意外と即座でおとなしく要求を応じようとするお富に、今度は新公が驚き、結局何もせずにお富が猫を連れ去るのを見送り、「村上新三郎源の繁光、今日だけは一本やられたな」と夕日を眺めながらつぶやく。

二十三年後の明治二十三年三月二十六日、第三回内国勸業博覧会が上野で開会式を催した時、偶然にもその場で時計屋の女房で三人の子の母になったお富は、明治政府の功績者になった新公の晴れ姿を見つけ、互いに目線を交わす。昔、猫を救うために自分の貞操を任そうとした挿話を思い出すかのように、お富は「何事もないやうに」、「活き活きと、嬉しさうに」微笑んで見せる。

作中の設定背景には、上野というトポス、そして明治維新时期という時代の文脈がふんだんに取り入れられている。テキストの冒頭から既に導入した物語の場所と時間の設定には、いくつか重要な留意点が納められたと思われる。

まずは場所から検討してみよう。明治元年（一八六八）の上野は、その年に起きた戊辰戦争の戦場の一つとして知られている。この戦争は、わずか一日で佐幕軍が新政府軍に鎮圧される形で終結した。

上野は幕末明治初期戊辰戦争の激戦地で、新公が戦闘員として立ち向かうことで上野に現れることが想定される。上野もまた、維新後に明治政府による様々近代的な施設や催し物を設けられ、内国博覧会という形で明治政府の統治力を開示し、近代化のショーウィンドウとして機能していく。上野という場所は、五回にわたる博覧会の

ほか、博物館、美術館、鉄道駅など近代的なイベントや施設によって維新の色を塗り替えられ、明治政府に成功的に再利用されている。開化の成果を並べて「近代」を演出する舞台としての役割を果たしているのである。吉見俊哉は、「まさに徳川幕藩体制の崩壊を象徴的に語る出来事だが、重要なのはむしろ、このように一度は焼野原と化した上野が、明治国家体制の成立と軌を一にして、新たな意味を担った空間として再登場してくることである」と述べ、芥川龍之介が開化物「お富の貞操」の背景を上野にすることで、幕末明治期における上野のトポス的なイメージを有効的に取り入れようとする意図が窺える。また、

明治元年五月十四日の午過ぎだった。「官軍は明日夜の明け次第、東叡山彰義隊を攻撃する。上野界限の町家のものは何処へでも立ち退いてしまへ。」——さう云ふ達しのあつた午過ぎだった。下谷町二丁目の小間物店、古河屋政兵衛の立ち退いた跡には、台所の隅の鮑貝の前に大きい牡の三毛猫が一匹静かに香箱をつくつてゐた^三。

と、冒頭に時間と空間の表記と共に描かれた、さり気なく取り残された一匹の三毛猫は、表題に出てくるヒロインお富をすでに立ち退き地域となった上野の或町家に招来する原因となり、新公とお富が接点を持つきっかけともなる。

次に、テキスト設定の時間を検討する。「お富の貞操」は、いわば

二幕物の構造を持っており、それぞれ慶応四／明治元（一八六八）年五月十四日と、明治二十三（一八九〇）年三月二十六日という時間設定が設けられている。それも作者は大雑把ではなく、明確かつ仔細に物語の時間を明示することで、リアリティを作品に吹き込んだ。物語の時間について、芥川龍之介は大正十一（一九二二）年三月三十一日付の塚本八洲宛の書簡に次の問い合わせをした。

（一） 明治元年五月十四日（上野戦争の前日）はやはり雨天だったでせうか

（二） 雨天でないにしてもあの時分は雨降りつづきだったやうに書いてありますが、上野界限の町人たちが田舎の方へ落ちるのにはどう云ふ服装をしてゐたでせう？ 殊に私の知りたいのは足拵へです足駄、草鞋、結び付け草履、裸足、などの中どれが一番多かったでせう？

（三） 上野界限、今日で云へば伊藤松坂あたりから三橋へかけた町家の人々は遅くも戦争の前日には避難した事と思ひますがこれは間違ひありますか？ 念の為に伺ひたいのです皆面倒な質問ですがどうかよろしく御返事下さいかう云ふ点が判然しないと来月の小説にとりかかれたいのです 頓首^三

以上の引用から、芥川龍之介は設定にかなり力を入れたことが伺える。その日の天候と、おそらく新公の設定に使う上野界限に往來

する人間の身なりと、上野における疎開の状況まで緻密に考察して、この「お富の貞操」を描き上げたのである。二つの時間、そして同じ上野の地に起きた出来事を前後並べて比較することで、日本の開化以前と以後の変遷が明瞭に浮き彫りにされるといふ芥川龍之介のレトリック戦略が見える。

上述のように場所と時間の設定が成立した。あとは作中人物を拵えられたテキストの世界の中に泳がせるのみである。次に、登場人物の新公とお富の描写を見てみよう。「垢にはまみれてゐても、眼鼻立ちは寧ろ尋常だった^四」という不潔な身なりをした乞食新公が突如現れたことに、猫はあまり驚きの様子を見せないことから、前よりこの上野にある古河屋政兵衛の小間物店に頻りに出入りする人物だということが想定できる。乞食の活動範囲は特定できないが、この猫との遣り取りから見て、新公は上野に常駐し、土地勘がある人物であろう。

後半明治二十三年のくだりに、地の文に出てくる新公が「ただの乞食ではない」として書かれたことも、明治元年の新公の「眼鼻立ちは寧ろ尋常だった」と記されたことから示唆される。何しろ乞食は社会の落ちぶれて、最初から一般人と同じような立ち振舞が求められていない。ゆえに、「尋常」であることが珍しがられるのではないのであろうか。身振り手振りなどの些細な描写から、語り手芥川龍之介の伏線が緻密に埋め込まれている。次に、明治元年の新公とお富の間に起きた喧嘩の結末を見てみよう。

——更に又何分かの後、一人になった新公は、古湯帷子の膝を抱いた儘、ぼんやり台所に坐つてゐた。暮色は疎らな雨の音の中に、だんだん此処へも迫つて来た。引き窓の綱、流し元の水瓶、——そんな物も一つづつ見えなくなつた。と思ふと上野の鐘が、一杵づつ雨雲にこもりながら、重苦しい音を拡げ始めた。新公はその音に驚いたやうに、ひっそりしたあたりを見廻した。それから手さぐりに流し元へ下りると、柄杓になみなみと水を酌んだ。

「村上新三郎源の繁光、今日だけは一本やられたな。」

彼はさう呟きざま、うまさうに黄昏の水を飲んだ。……五

ここでは、お富が貞操を全つたまででお上さんの可愛がつている三毛猫を無事に連れ去つた後、その場所に取り残された新公の様子が描かれている。「上野の鐘が、一杵づつ雨雲にこもりながら、重苦しい音を拡げ始めた」のは、時間が刻一刻容赦なく進んでいくことを示唆し、来るべき戦争が迫り来ることのメタファーともなつた。ここで作者芥川龍之介がまたひとつ大事なキーワードを埋め込んで。それは、新公のつぶやきである。新公は「村上新三郎源の繁光」という人物で、村上源氏という立派な武家の後裔として設定されている。幕末は古湯帷子を身に纏う乞食の姿で上野界限に潜伏し、銃を持つているただならぬものと想像される。喧嘩の末、新公は呆気にとられ、貞操を許そうとしたお富のバイタリテイにただただ圧倒された。「うまさうに黄昏の水を飲んだ」という描写も、雨上がり

の天気と新公の心象風景が合わさつて、貞操争奪戦という茶番を後味よくフェードアウトさせているように伺える。

それに、この打ち合いの結末に持ちかけられた新公の武家の後裔という設定には、テクストにおけるどのような意味合いを持つていたのであろうか。のちほど他の資料を導入し分析する。

次にヒロインお富を検討してみよう。お富は、大のお上さん想いな上、「猫を取り戻す」という指令を貫き通そうとする正直者で、命と同価の貞操を捨てても猫を救おうとする。最後はお上さん古河屋政兵衛の甥と結婚し、円満な家族を築き、小さな成功を収める。テクストには書かれていないものの、お上さんの深い信頼を得たからこそ、古河屋政兵衛の甥との婚姻関係が結ばれたのではないか。お富の魅力について、紅野敏郎は「いわゆる肉感的な女性、頽廃の要素を色濃く持った女性、というのではなく、健康で律儀な、まめめらしい、素朴で働くことを愛する快活な女性が、自然にもっている魅力である」と論じている。お富が新公に脅迫され、銃が猫に差し向けられた時、瞬発的に自らの貞操を許そうとしたことは、与えられた任務、つまり猫を無事に取り戻すことを優先に考えていたことが原因なのであろう。このような切羽詰まった非常時に、短時間の中でなされた決断こそが、普段お富がお上さんにひたすら忠実に奉仕する一心から来る行いだったのではないであらうか。

「まあ肌身を任せると云へば、女の一生ぢや大変な事だ。それをお富さん、お前さんは、その猫の命と懸け替に、——こいつはどうもお前さんにしちや、乱暴すぎるぢやありませんか？」という新公の問

いに「何と云へば好いんだらう？ 唯あの時はああしないと、何だかすまない気がしたのさ。」というセリフを言わせたのではないかと思われがちだが、「お上さん」の命令を遂行しようとする、自分より優位に立つ権威者のためにとつたお富の自己犠牲の行動の側面も、見過ごす訳にはいかない。そしてこの自己犠牲への評価は、芥川龍之介が二十三年後の幸せなお富を描くことで肯定的に捉えた。あの時、貞操が犠牲にされていなかったからこそ、お富は今の家族の前に、気を病めることなく「活き活きと、嬉しさうに」新公の晴れ姿を直視できたのであろう。つまり、従来「無意識」とされた若い女性の心理の微妙な変化を説くより、召使いという身分から奉公すべきだという心的論理がお富の行動様式を強く支配する。その論理というファクターが、貞操か命かという選択の前に決定的な影響を与えたと思われる。加えてお富の持ち前の活力は、その後の長い歲月において自らの運命を切り開き、テキストの中で幸福な生活が用意されるのである。

新公とお富の位相関係についても、検討する余地があると思われる。テキストの冒頭で新公と猫との親しい遣り取りからも窺えるように、上野で活動する乞食新公と小間物屋の使用人お富も前から交流のある知り合い同士であることがはっきりとわかる。テキストで注目すべきなのは、お富が「何だい、お前は新公ぢやないか？」と常体（タ形）での語りかけに対し、新公は「どうも相済みません。あんまり降り強いもんだから、つい御留守へはひこみましたかね——何、格別明き巢狙ひに宗旨を変へた訣でもないんです。」と、丁

寧語（デスマス形）で返事するところである。これは、物語で現れるお富と新公の最初の会話だが、充分に二人の位相関係を伺い知ることができる。年齢や知見もお富が明らかに劣っているのに、乞食の新公に対する態度は横柄そのものである。にもかかわらず、新公はあまりそれを不快に思っていない様子。お富と新公の間には、既にある種の信頼関係が介在しているからだと想定出来るであろう。

この短編で見る二人の最初の会話だが、むしろお互い気の知れた友達同士の遣り取りのように見える。その信頼関係は、一瞬の争いによつて崩壊したかと思えば、次の瞬間に、「何分かの後、懷に猫を入れたお富は、もう傘を片手にしながら、破れ筵を敷いた新公と、気軽に何か話してゐた」とあるように、二人が落ち着いて会話を再開することで見事修復したということが伺える。

以上のことから分かるように、「お富の貞操」は芥川龍之介開化物作品群のなかでも、場所、時代、人物すべての要素が互いに巧みに関与し、一つの機関として相俟つて連動して初めて成立する作品だ言つても過言ではないのであろう。

三 ストリンドベリ「令嬢ジュリー」と 新公の出世物語

芥川龍之介は、スウェーデン作家ストリンドベリ（一八四九—一九二二）の戯曲「令嬢ジュリー（Fröken Julie）」（一八八八）から「お富の貞操」の着想を得たとみられることは、すでに森本修^七に説かれ

ている。森本修は、お富が「無分別にも、一匹の猫を救ふ為に、新公に体を任さうとした」動機と、新公が「彼女が投げ出した体には、指さへ触れる事を肯んじなかつた」という行動をとったことの鍵が、この「令嬢ジュリー」にあると考える。同氏の論文は、お富が貞操を委ねるまでの動機の多様性という側面を「令嬢ジュリー」から着想を得て、更にそれを「お富の貞操」に応用したと指摘している。筆者は、これまで多く研究されてきたお富とジュリーの女性的な側面の他に、従来看過されがち新公の側面を「令嬢ジュリー」の男主人公ジャンの上昇志向と併せて論考を進めたい。

ストリンドベリの戯曲「令嬢ジュリー」の梗概は、以下のようなものである。夏至の夜、伯爵家の台所で、下男ジャンと料理人でジャンの婚約者であるクリスティンが話している。婚約が破談になった令嬢ジュリーがそこに現れ、ジャンと一緒に踊ることを要求する。クリスティンが寝たあと、ジャンは令嬢ジュリーと二人の夢を語り合う。生来卑しい身分にあるジャンはジュリーに想いを打ち明け、それに感銘を受けたジュリーは自分の家庭の欠陥を告白する。今度はジャンと一緒にスイスカイタリアへ逃げ新生活を始める話を持ち出すが、ジュリーは二人の考えの違いに気づかされ、混乱してしまう。やがて夜明けに伯爵が帰りのベルを鳴らし、ジュリーはジャンが渡した剃刀を手に納屋へ行き、幕を閉じる。

次に引用するのは、ジュリーと下男ジャンが夢を語り合う場面である。この部分でジャンの上昇志向が露わになる。

令嬢 多分ね、だけどあなただってそうよ、結局、みんな不思議なんじゃありません、人生も、人間も、なにもかもが。みんな水のなかに浮かぶゴミ屑のように、あちこち動きまわるだけ、落ちて、沈みきってしまうまではね。よくこんな夢を見るの、いつまでもそれを思い出さずにはいられないの。その夢のなかでは私、高い柱の上にすわっているんですけど、どうしても降りなれそうもないの。下を見ればめまいがする、どうしても降りなければならぬのに、その勇氣はない、もうとてもつかまっではいられなくなつて、いつそ落ちてしまえばと思うんですけれど、落ちないの。そのくせ下に着くまではいらいらすばかり、下に、地面に着くまでは安心できないの。でも下へ、地面に着いたら、今度はもつと下へ、地の底へ潜り込みたくなるのかもしれないわね。あなたはそんな気持ちにおなりになったことありません？

ジャン ございませぬね。私が見ますのはまず、暗い森の、大きな木の下に横になつてゐる夢ですね。上へ登つて行きたい、高い梢の方へ、太陽の方へ登つて行つて、陽の照る景色を見渡したり、上の方にある鳥の巣を探し当てて、黄金の卵を手に入れたい、そう思つて必死にのぼるんですが、幹は太いし、つるつる滑るし、おまけに最初の枝までがひどく遠い。だが、その最初の枝に手が届きさえすれば、あとは梯子を登るみたいに頂上まで行けることは分かっているんです。まあ、そいつに手が届くとこまでは、まだ行つていませんが、いまに届きますよ、

たとえ夢のなかだけでもね^ハ。

ここで交わした会話には、高いところから落ちてゆくという夢を見たジュリーと、ひたすら這い上がろうとするという夢を見たジャンの姿があった。夢の話は、そのまま二人の位相のメタファーとして語られている。

両作品は、元々登場人物の女性お富、ジュリーより下に位置づけられる男性新公、ジャンが、調子に乗って様々な要求をするようになるところに共通点がある。「お富の貞操」では、村上源氏という武家の後裔が乞食の成りで上野で活動するが、戦争という機会をつかみ新政府の功績者として上り詰める。二十三年前のある午後、新公は誠実な心持ちを通し「彼女が投げ出した体には、指さへ触れる事を肯んじなかつた」といい、お富の貞操を奪わなかつたことと、「村上新三郎源の繁光、今日だけは一本やられたな」と呟くことから、その改心ぶりをうかがい知ることが出来ると思われる。そして、「令嬢ジュリー」は、一夜のみの短い期間で起こった話を描いているが、男女の身分の決定的な差から、到底恋愛が実らないと想定できるであろう。

「令嬢ジュリー」の会話には、下男ジャンの上昇志向を強く前面に出しており、これまで強気だったジュリーの態度を一変させたことが、引用の文章の中でも知ることが出来るであろう。そのジャンの上昇志向は、ジュリー自ら不都合な身の上話を告白させられるほどの度合いを持っている。それに対し、「お富の貞操」の新公は、武家

の出のプライドが暗に支えていると思われる。そして世間から期待され、自らが自分自身に課する「しかるべき行動」は、お富と同様に、二十三年後の出世が保証されるように見える。新公の成功は、明治元年の時点では予期できなかったものの、語り手芥川は二十三年後の成功という後日譚を用意し、新公の改心・出世の一部始終をようやく見せたのである。前述した二幕劇的一幕目・明治元年の終尾に出てくる新公の「武家の後裔」であることの自白は、この所で役目を果たしたのである。

四 貞操のレトリック

タイトルが「お富の貞操」とはいうものの、芥川龍之介が周到に言葉を選択する結果であろうか、テキストには「貞操」の文字が全く見当たらない。にもかかわらず、「貞操」を論じるのに十分有り得るテキストに仕上がっているのである。ここではテキストより新公とお富の描写をいくつか汲み上げ、貞操のレトリックと言説問題の形成を考察する。

まずは、上野界限の或町家で新公とお富がばったり出会った場面に遡る。新公は「髭だらけの顔をさすりながら、じろじろその姿を眺めてみた」とあるように、その視線は如何にも無遠慮そのものである。新公の目に映ったお富は「色の浅黒い、鼻のあたりに雀斑のある」、いかにも田舎者らしい小女である。しかしながら新公は「活き活きした眼鼻立ちや、堅肥りの体つきには、何処か新しい桃や梨

を聯想させる美しさがあつた」と、俗物的な物事から魅力を見出した。殊に果物の桃や梨に対する食欲のイメージを取り入れて、それを暗に性欲を提示していることが想像出来るであろう。そして、その新公の性欲はエスカレートしていく。言い合いで怒ったお富に対して「彼女の権幕には驚かなかつた」し、「のみならずしげしげ彼女の姿に無遠慮な視線を注いでゐた」。新公はこの場面で完全に男が若い女性であるお富を性的な眼差しで観照する目つきになつた。それは「雨に濡れた着物や湯巻、——それらは何処を眺めても、ぴつたり肌についてゐるだけ、露はに肉体を語つてゐた。しかも一目に処女を感じる、若々しい肉体を語つてゐた」と明らかにするように、性的なニュアンスを露骨にあらわしたテキストに変わる。さらに新公は「町家は並んでゐても、人のゐない野原と同じ事だ」「お前さんとわたしと二人つきりだ。万一わたしが妙な氣でも出したら、姐さん、お前さんはどうしなさるね？」と、犯罪めいたことをお富との会話に持ち込む。

テキストを要約すると、「貞操」という言葉自体が全く言及されない貞操の言説は、以下のように形成される。

- ① お富の身体が新公の性的な観照の対象になること
- ② 「人のゐない野原と同じ」ような上野の町の密室に、男女がふたりきりになること
- ③ 若い女性の身体が、性的なニュアンスを帯び始めること
- ④ 「処女」の言葉の現れ
- ⑤ 貞操問題の発生

といったプロセスである。

また、芥川龍之介は「貞操」という言葉を避けるだけでなく、「小倉の帯の解かれる音、畳の上へ寝たらしい音。——それぎり茶の間はしんとしてしまつた」と、お富の仕草で派生する音の間接表現によつて性的な直接描写を回避できた。

下手な抵抗したら、逆に相手の征服欲を高め、犯行に及ばれていたのかもしれない。ここで新公が呆れたのは、意外にも貞操を任せようとするお富の行動だと思われる。そして新公は、人の大事な貞操を暴力を以つて簡単に奪おうとする自分自身を恥じる気持ちもあつたのではないだろうか。

身体論のフィルターを通してテキストを読むと、お富の動作によつて生成した「小倉の帯の解かれる音、畳の上へ寝たらしい音」がそのまま脱衣＝聴覚による身体表象の比喻につながる事が分かり、視覚の即物的な描写より効果的になると思われる。女性の着物の帯など、身体の外部に取り付けられているものでさえ体の延長として捉えることができる。極端に言えば、田山花袋の「蒲団」（明治四〇年九月）のような、一種のフェティシズムさえもありうる。芥川は本作において、音という婉曲表現のみで性を表象し、性的描写に関しては必要最小限に抑えることに成功した。

五 身体と近代化

——一九二〇年代日本の貞操にまつわる言説

芥川龍之介の開化物について、安藤公美は「近代以降に日本に生きる人々が自明している制度への、その始源への問い直しを誘発する仕掛けを有した小説群^{二〇}」と規定し、「お富の貞操」については「時代を引用することで近代のシステムを十分に可視化する」テキストとして捉えている。

芥川龍之介は、「お富の貞操」において明治元年・明治二十三年という二つの時間背景を利用し、作者自身を取り巻く一九二〇年代の貞操にかかわる諸言説に、彼なりの主張を提唱しようとしていると思われる。では、作品が書かれた大正十一（一九二二）年、社会を取り巻く貞操事情はどういうものだろうか。川村邦光は、一九二〇年代の貞操観について以下の考察を進めた。

『処女』や『貞操』は明治末期あたりから社会的問題として登場し、以後も途絶えることなく問題視されたが、戦前においては二つのピークがあったように思われる。一九一〇年代、『青鞥』が創刊されて、『新しい女』が出現したとき、それに一九二〇年代の中頃、大正末期にモダンガールが流行の先端として、マスメディアによって騒がれたとき、この二つの時期がそれである。いずれも、女性の道徳的な頹廃・墜落、それも『貞操』といった性道徳の乱れがスキャンダラスに取り沙汰されたときにあた

る^{二一}。

『青鞥』などが代表する、女性としての意識を高める婦人雑誌の出現や通俗小説はその貞操意識を確立させることに一役買うのに違いないと推測出来るであろう。大正中期以降、メディアに頻出する「貞操」という言葉自体も、確実に読者の貞操についての意識を高めたと思われる。また、先述した安藤公美の先行研究には、大正期にこれらの貞操にまつわる言説が再び盛んになったのは、先述のモダンガールの「性道徳のみだれ」のほかに、大正九（一九二〇）年、ロシアのニコラエフスクで起きた多くの現地在住日本人女性がロシア軍にレイプ・殺害された尼港事件が世論に甚大な波紋を及ぼしたという考察がある。それ以来しばらくの間、女性の「貞操か、死か」がメディアに取り上げられ、問題視されるようになっていく。しかし「お富の貞操」では、命が脅かされたのはお富本人ではなく、お富が可愛がっている三毛猫である。尼港事件で女性の「貞操か死か」という問題が議論になる中、芥川龍之介があえて大正十一（一九二二）年に「お富の貞操」を書き、「貞操か、猫の死か」という奇抜な設定で機知を働かし、この社会事件に感興を起こして、一捻りした書き方をしたのではないかと思われる。その問題の構図を軽やかにパロディ化する芥川龍之介の理知的な作家の一面が伺える。それと同時に、芥川は貞操論争のどちら側にもつかず、高所から見物しているような超然的なスタンスを読者に見せたと思われる。

次に、近代日本における「貞操」の概念の形成を検討し、身体と

国家の結びつきを再考する。本田和子は、明治以降日本の貞操観を「明治近代化に伴い、欧米の性道徳に触発された支配層は、「貞女は二夫にまみえず」という儒教的女性観を西欧的貞操観で補強^三」するものとして、倫理上・道徳上女性への束縛と見る。つまり、明治以降の日本は、従来の儒教が支配的だった東アジアの道徳倫理観のほか、明治維新で西洋から学んだ欧米的な女性の処女性に関する諸言説を加え、二重の桎梏を女性に強いようとしている。

「近代化」は、明治以降の日本における国を挙げて推し進めたムーブメントであり、その近代化の波紋は国民全体の如何なるレベルの生活にも広まったことは間違いない。鈴木貞美は、日本の近代化の特色を以下のように述べた。

「近代」をどのように定義するにせよ、国民国家建設と国民文化の組織化という互いに支えあう二つの動向を無視して、「近代化」を語ることができない。（中略）日本は「近代天皇制」の下で列強に伍す勢力を養い、二〇世紀の国際情勢の中で、西欧十九世紀の植民地経営とは異なる形をとりながら、東アジアに帝國的な膨張をおこなってゆく^{三二}。

明治政府の至急な目論見は、徳川幕府が西洋列強と結んでいた不平等条約の改正もしくは撤廃である。外から侵入しようとする西洋列強の勢力から国民を守り、進んで近代国家としての強さを確立するには、まず軍勢力を向上させるのが一番ストレートな方法だと考

えられる。近世から近代に移す際に、一人ひとりの国民の身体は、戸籍の登録などの手続きによって、国家に厳重かつ綿密に管理されるようになる。そして国家は国民に徹底的な管理を施すことによって、戦争に備える優秀な国民の身体を作り出す。国民教育などの管理によって均一化された身体が、そのまま軍事に必要な人力（直接戦争に関与する兵士、銃後の守りといった戦争のための労働力）になるのである。国家側で考える貞操は、身体面から言うと、性病から身を守る衛生管理につながり、心理面では、社会のモラルが乱れることなく、家庭内、乃至国内社会全体の平和が守られるという効果が期待されるのである。

六 まとめ

性的犯行が未遂に終わり、お富の貞操が奪われずに済むことと、新公、お富それぞれが後々成功を収めたことに、書き手は二人の行動を肯定的に捉えたことを感じる。一匹の猫のために、大事な貞操を任そうとした女性は、いささか不思議ではあるが、この構図を別の角度からみれば、貞操は、尊い命と同価であることになる。その生命が猫の命であろうと、貴重な存在である。犯されるであろうという犯行が未実行に終わると同時に、猫の命とお富の貞操が保たれ、二十三年後の美談につながる。物語の結末から検討すれば、お富が一瞬放棄しそうになった貞操が新公の諦観によって守られたため、後の幸せな生活や立身出世が保証されたというふうに見える。書き

手芥川龍之介が自ら提出した貞操観念の問題意識を、端正な道徳観によって収束したと見て良いであろう。さらに、「令嬢ジュリー」との比較によって、男女の位相、男性の持つ上昇志向が明らかになり、男主人公新公二十三年來の改心談と立身出世がお富の話とは対等的な存在であることが改めて喚起された。

上野で始まり、二十三年後また上野で完結するこの短編は、日本の近代化を見事に可視化したテキストだと思われる。上野は明治開化期の都市空間における重要な役割を果たしたことも注目値する。本作品の登場人物お富と新公は、物語後半部の再会の場面で文明開化Ⅱ近代化のお手本として造形された。その個々の成功をすべて包括する明治日本の隆盛ぶりは、まさに上野で開かれた内国博覧会によって具体的に描かれ、お富の幸福な家庭と新公の身に纏う名誉の標章によって可視化されたのである。これらの表象の背後に隠された明治政府の国民国家強化のイデオロギー、そして国民一人ひとりの上昇意識が形作られ、近代に対する意識が確立される過程が垣間見ることができるといえよう。

近代国家の文明開化の祝祭は、当然のことでありながら国民全体の参加が強く要請される。国民の参加によってはじめて成立すると同時に、参加する国民自身も国家の結束力に縛り付けられ、互いに引力を高めていき、やがて全国へ広まっていく。上野という明治維新の開化建設の最先端に立たされるお富と新公は、方や開化の賢妻良母のお手本である銀座の時計屋の女房で、方や政府の功労者として造形された。それぞれの身体が二十三年間の文明開化に漬けこん

で、明治元年よりも遥かに近代化されていると思われる。彼ら、もしくはは参加した明治の国民たちは、博覧会へ品物を鑑賞すると同時に、自己の身体もまた鑑賞される対象として見立てられるのである。

(こう けいこう・言語文学専攻)

参考文献

- 吉田精一『芥川龍之介』、新潮社、一九五八年一月
 森本修「お富の貞操」、駒沢喜美編『芥川龍之介作品研究』（一九六九年五月）所収
 紅野敏郎「お富の貞操」のお富（『国文学』十四卷、一九六九年十月）
 柘植光彦「同時代への羨望——「お富の貞操」論」（『国文学』二〇卷、一九七五年二月）
 平岡敏夫「芥川龍之介における〈明治〉」（『国文学』三十卷、一九八五年五月）
 酒井英行「『お富の貞操』、『六つ宮の姫君』について」（『静大国文』三六卷、一九九二年四月）
 関口安義編『芥川龍之介研究資料集成 第二巻』所収、日本図書センター、平成五年九月
 川村邦光『オトメの身体——女の近代とセクシュアリティ——』紀伊國屋書店、一九九四年五月
 尾形勇、川北稔等編『歴史学事典 第二巻 からだとくらし』所収、弘文堂、一九九四年十月
 川村邦光『セクシュアリティの近代』講談社、一九九六年九月
 山崎甲一「『お富の貞操』について——目と心」（『文学論藻』七二卷、一九九八年三月）

鈴木貞美「国家を組織する思想、国家を超える思想——身体、血、生命——」、木栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知 身体・よみがえる』、東京大学出版会、二〇〇〇年七月

岡仲夫、鈴木貞美編『技術と身体——日本「近代化」の思想——』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年三月）所収

楊淑容「芥川龍之介「お富の貞操」論——共有した時間の記憶」（『日本文芸論稿』三十巻、二〇〇六年三月）

安藤公美「芥川龍之介 絵画・開化・都市・映画」翰林書房、二〇〇六年三月

池井望、菊幸一編『「からだ」の社会学——身体論から肉体論へ』世界思想社、二〇〇八年八月

吉見俊哉『都市のドラマトウルギー』、河出書房新社、二〇〇八年十二月（原本は一九八七年七月、弘文堂により刊行）

松浪稔『身体近代化——スポーツ史からみた国家・メディア・身体——』叢文社、二〇一〇年二月

吉見俊哉『博覧会の政治学』講談社学術文庫、二〇一〇年五月（原本は一九九二年、中央公論社により刊行）

注

- 一 吉見俊哉『都市のドラマトウルギー』、河出書房新社、二〇〇八年十二月（原本は一九八七年七月、弘文堂により刊行）、一三四頁
- 二 芥川龍之介「お富の貞操」本文（『芥川龍之介全集 第九巻』、岩波書店、一九九六年七月）、一九二頁
- 三 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第十九巻』（岩波書店、一九九七年六月）、二四四頁
- 四 同注二、一九三頁

高 近代化された身体

- 五 同注二、二〇五頁
- 六 紅野敏郎「お富の貞操」のお富」（『国文学』十四巻、一九六九年十月）、一七一頁
- 七 森本修「お富の貞操」、駒沢喜美編『芥川龍之介作品研究』（一九六九年五月）所収、一九一頁
- 八 ストリンドベリ「令嬢ジュリー」本文、千田是也等訳『ストリンドベリ名作集』（白水社、一九七五年八月）、六五頁
- 九 同注二、一九七頁
- 一〇 安藤公美「貞操・戦争・博覧会——「お富の貞操」、『芥川龍之介 絵画・開化・都市・映画』翰林書房、二〇〇六年三月、一九五頁
- 一一 川村邦光「オトメの身体——女の近代とセクシュアリティ——」紀伊國屋書店、一九九四年五月、一三五頁
- 一二 本田和子「貞操」より抜粋（尾形勇、川北稔等編『歴史学事典 第二巻 からだとくらし』所収、弘文堂、平成六（一九九四）年十月）四八六頁
- 一三 鈴木貞美「国家を組織する思想、国家を超える思想——身体、血、生命——」、岡仲夫、鈴木貞美編『技術と身体——日本「近代化」の思想——』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年三月）所収、五一頁